法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-27

〈法政大学国文学会総会議演・研究発表要旨〉中世文学研究の動向

正木, 信一 / MASAKI, Shinichi

(出版者 / Publisher)
法政大学国文学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
日本文學誌要
(巻 / Volume)
2
(開始ページ / Start Page)
65
(終了ページ / End Page)
67
(発行年 / Year)
1959-03-01
(URL)
https://doi.org/10.15002/00018964

あう閑話に花を咲かせ、それに興をそえる意味で、しばしば滑稽な表現が折込まれたことだろう。つまり語り手が聴く者の心を牽引し、興味をもって飽かせず傾聴させる一種の語りの技術として、その当時までに発達させられていたものであろうと思われる。伊勢の作者たちは、これを説話文学創出の一表現技術として踏襲し、簡潔にしてみやびな伊勢の美しい文章のうちに生かしていったのであろうと推定される。

次に伊勢の「滑稽は、単なるをかしみのためではない。そこには当時の人の恋愛生活に対する一種の批判が潜んでゐる」という津田氏の言について、氏の例証の一つである「つくも髪の嫗の恋」（六三）をとりあげて考えてみたい。

この説話の末尾には説話者の言葉として、「世の中の例として、思ひ思はぬ人あるを、この人はそのけぢめ見せぬ心なむありける。」とある。これが説話全体の中にあっては、主人公業平を賛える意味をもたされてくる。即ちその内容は、業平が男盛りの三人の子の母である「つくも髪」の老女の末の子から、母に逢ってくれるように頼まれると、その親を思うあわれな心に動かされ、一度逢ったこと、そしてまた老女であるにもかかわらず、彼を恋慕する思いの深さ、まして彼女の詠んだあわれな歌に心動かされ、再び泊ってやったということなのだから、従って末尾の言葉は、世にも稀にみるあわれを解する「みやびを」として業平を賛えていることになる。

そうみてくると津田氏がこの説話での滑稽が「当時の人の恋愛生活に対する一種の批判」にはなっていないことがわかるし、また氏がいうように「初から滑稽につくられた老女の恋」ではなかったことも明らかとなろう。

ともかくこのような伊勢物語に対する津田氏の誤れる論述は、氏の著述では稀にみるものであるかも知れないが、これはさきに問題にした「伊勢物語全体の調子」としてとらえたところに根ざしている。

つまり説話者の言葉に個性化された性格が与えられ、そして物語られている人物に対する説話者の態度と関係が明らかにされ、説話の内容に一定の評価を与えていることをみきわめることができなかったからである。従って作者によって描かれている主題について作者がいわんとするもの、つまり作者の評価がその作品を書いた思想であるとするならば、またさらにいいかえれば作品に描かれるもの自体によって作者が物語るものであるとすれば、津田氏はまず伊勢の説話群の――伊勢全体の主題を正確にとらえることができなかったために、その思想さえも正しく究明することができず、平安朝文学一般に通じる普遍的特質としての「自己反省自己批判」に帰納させるべく、かなり無理をしている結果となり、その滑稽も主題との関連性の上で、正しく位置づけられずにしまったのではなかろうか。

（昭和二四年本学日文科卒・潤徳女子高校教諭）

中世文学研究の動向

正木信一

一

戦争中歪められた中世への評価は、終戦とともにその反作用をうけ、あらゆる中世的なものが十把ひとからげに否定された。中世的

即日本的＝国家主義的という定式が、中世的＝封建的＝反民主的の対隅式をうんだのである。しかし民主社会の建設のために前時代的な、中世的なものが否定されなければならないにしても、その否定のされかたが問題となるはずであった。

一九四六―七年、民主的国民運動や労働運動の高揚のなかで、しだいにマッカーサー軍政はその実体を露呈してき、サンフランシスコ体制以後、とくに民族の真の独立への希求が強まるとともに、日本の古典とくに中世の見なおしがおこなわれはじめた。

それは一方に反動的な復古主義への危険をはらみつつ、しかし一方で中世を革新の時代としてとらえる眼が、ほかならぬ現在の国民の革新へのぞみにささえられて見ひらかれたといっていい。

二

もちろん学問の世界では早くからそうした見方があり、とくに戦前の永積安明氏や風巻景次郎氏などの業績にそれがあらわれているが、戦後のはやい時期には永積氏の「封建制下の文学」と前後して歴史学の方から石母田正氏の戦前のしごとが「中世的世界の形成」としてまとめられ、その中で中世文学についての示唆的な所論があったほか、こんにちまでの間に多くの歴史学者によって文学がとりあげられてきている。中世に限っていえば、松本新八郎氏の狂言、武者小路穣氏の絵巻物を通しての戦記、桜井好朗氏の同じく戦記、林尾辰三郎氏の芸能史的考察など、それぞれに大きな問題を提起されたが、総括して説話、戦記・狂言という一つの系列が考えられ、文学創造に参加する民衆をクローズアップする方向に共通の姿勢があった。歴史変革の主体を民衆に求め、中世文学と民衆との接点を明らかにすることによってこんにちの変革への要請にこたえようとされたものであろう。そのあいだに文学研究の側でも、これらの諸作品とくに平家物語・狂言などの原型をさぐるしごとが、従来の文献学・書誌学とちがった意味をになってねばり強く続けられてきたことも忘れられてはならない。

作品分析や評価の問題で、永積氏や谷宏氏の戦後のしごとも一段の進展を示した。たとえば永積氏の戦前の平家物語論では、作者が大きくとりあげられていたが、戦後の諸論文では享受者がそれにおとらぬ比重で問題とされている。なお平曲の聴衆については渥美かをる氏の調査が再三ならず発表されたことも見のがせない。

三

ところが中世文学にはこの系列のほかに、古代の伝統に直接するもう一つの文学系列があり（和歌―連歌―俳諧とつながる流れがそれで、能もこれに含めることができよう）、それが中世文学を考えるばあいに重要な半面となっている。これらのジャンルでも戦後新しい資料が多数発見され、その系列の再評価が日程にのぼってきたのも当然な順序であった。

しかし中世文学に併立する貴族的・保守的な世界と武士的・革新的な世界とは、じっは一つの作品の中に共存しているのが常で、前者を代表する新古今の中にも反古代的な要素はあるし、後者を代表する戦記の中にも前中世的な側面を認めるのは容易である。

四

研究が学問的に細分化すれば中世文学の二つの世界がおのずから研究の二つの系列を生ずるのは自然であるが、近年この両者を統一的に把握しようとする試みがはじめられた。数年前からの谷宏氏の業績がそれで、氏は戦記とくに平家物語や狂言の享受者を京都およ

びその周辺の市民層とし、これらの作品がもつ古代貴族的側面と中世武士的ないし庶民的側面との矛盾を、そうした都市民の中にさぐることによって統一しようとする。

しかしこれは、なお都市民の分析や、各ジャンルの個別研究の掘りさげが多くを今後に期待されている現段階では、両者の結びつけにかなりの問題を含んでいるようである。

五

ここで最後にこの二系列の接点における今年度最大の収穫となるであろう西尾実・永積安明両氏の論争にふれなければならない。(注)

中世文学研究の両先達の間における批判・反批判・再批判のなかで方丈記・徒然草論は非常に深められたが、両氏は前述した二系列のそれぞれの代表的学者であり、この論争は中世文学の矛盾の統一的把握へのそうした形による前進を示すものでもある。あえて大まかにいえば、西尾氏は中世的世界の確立を作品の内的世界の充実という観点からとらえてその完成を道元に求められ、永積氏は作品を外的世界との関連において把握し社会変革の実践と結びつけて評価される。これは一面両氏の現代に対する歴史的評価のデリケートな差にもとづくのであろうが、一面また両氏の従来のおもな業績――具体的なしごとが別な系列にぞくするものであったことにも無縁ではあるまい。

いずれにせよ、この論争は日本文学全体の研究に活気を与えたものであり、今後更に発展させられるであろうが、同時に、同じジャンルあるいは同じ系列の間の共同研究ばかりでなく、ことなる系列の間の共同研究が今後必要でもあり有効でもあるという大きな教訓をもわたしたちに示していると思う。

註　永積氏「方丈記序論」文学一九三六年五月号
西尾氏「作品としての方丈記」文学一九五一年四月号
永積氏「方丈記と徒然草」岩波講座日本文学史第四巻
西尾氏「永積氏の方丈記と徒然草を読んで」日本文学一九五八年七八月号

〔附記〕この報告は会員杉本圭三郎・島本昌一・遠山親雄三君との共同調査で、数次の意見交換の結果であるが、時間的制約と私の微力とのために充分三君の意見を尽しえなかった。これは一に私の責任である。またとりあげねばならぬ研究でもらしたものも多く、とくに西尾・永積両先生への失礼をおわびしたいと思う。

（本学日文科講師）

近松の世話淨瑠璃にあらわれた近世リアリズムについての考察

樋口孝治

一

近松の作品には一貫して暗い影とあでやかな光とが交錯している。その光とかげりは、ひとり近松の作品にのみとどまらず、近世文学の一様相でもある。それら近世諸文学では光とかげりとが雑然とあるのに対して、近松の作品には光とかげりとの統一と止揚が行なわれている。ある作品には分裂して存在し、ある作品にはみごとに統一され、高められている。後者に晩年の「心中天網島」の作品をあげるのに躊躇しない。この作品を近松文学の到達点として、「曾根